

## 学校司書の立場からの授業支援 ～できることからはじめよう～

### 1 発表の要旨

「学校司書の立場からの授業支援 ～できることからはじめよう～」

(宮下昌子、石山亜由子)

#### (1) 研究の概要

富山県では、中学2年生が一週間、職場体験や福祉・ボランティア活動に参加することにより、規範意識や社会性を高め、将来の生き方を考えるなど、生涯にわたってたくましく生きる力をつける活動「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」を全中学校で実施している。新湊南部中学校では、『14歳の挑戦』の事前・事後学習を総合的な学習の時間を中心に行っているが、平成29年度は指導内容の検討や学習のねらいの共通理解を図るなど、学校司書と連携した指導を試みた。

#### (2) 学校司書と連携した指導

##### ◆事前学習

「働くこと」や「生き方」に対する意識の高揚を図る6つの取り組み

- ①ブックトークー学年体制で事前学習・事後学習合わせて3回実施
- ②新聞の切り抜き掲示ー2学年廊下と図書館の2箇所に掲示。同じ新聞の中から、2学年職員と学校司書が別々に切り抜く。学校司書は働く人の気持ちや考えが読みとれる新聞記事に、一言添えて掲示。
- ③図書の展示ー働く人に関する書籍を展示
- ④地域ボランティアによる読み聞かせー働く人というテーマで選書を依頼
- ⑤DVD選定支援ー何を鑑賞すれば生徒たちに働く人の気持ちや考えが伝わるのか、学年担当と相談。
- ⑥生き方読書案内作成支援ーブックリストや読書案内見本の作成

##### ◆事後学習

「生き方を考える(こんな風に生きてみたいを見つける)」6つの取り組み

\*事前学習の①②③④は継続実施

- ⑤お礼状の作成・発表、準備資料提供
- ⑥生き方読書案内発表支援ー事前学習で作成した「生き方読書案内」に、『14歳の挑戦』を終え

ての感想も合わせて発表。本から得た働く人の気持ちや考えの情報が、生徒自身が実体験で味わった気持ちや考えと重なり、生きた情報となった。発表の場を設けたことは、情報を共有し、生徒が多様な考えに触れる機会にもなった。

#### (3) 成果と課題

- ①学校司書と連携して、学校図書館にある資料を用いた学習を行ったことで、生徒に様々な情報や学習の場を提供することができた。
- ②事前学習・事後学習に、適切な書籍や新聞記事を提示したことは、活字に触れるだけでなく、「生き方」を考えるよい機会となった。
- ③「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」を中心としたキャリア教育を、学年・学校司書・地域・国語科と連携して行ってきた。今後も学校司書と様々な形で連携しながら、1年間だけにとどまらない、3年間を見通した指導・支援のあり方について模索していきたい。

『三年国語の単元「本を使って調べよう」における授業支援ーシステム、物流、司書、未来へのつながりー～諏訪・上田・安曇野・駒ヶ根の場合～』

#### (1) 諏訪市の取り組み

(今井裕美)

市立図書館と小学校7校、中学校4校の図書館システムがネットワークでつながっている。他図書館の蔵書の検索・予約ができ、週に一回、専任職員が各校を巡回し、予約した本を届けてくれたり、他図書館に持って行ったりしてくれる。学校司書連絡会を月に一回行い、研修の機会が年に数回ある。平成28年度は子どもたちに勧めたい本のブックリストを作成。平成27年度は百科事典ワークの教材づくりとして、ポプラディアを使って調べる問題を司書全員で作成した。授業支援のためにシステム・物流・司書のつながりが構築されている。恵まれた環境をさらに生かした取り組みを模索していきたい。

#### (2) 上田市の取り組み

(宮島恭子)

市内5施設、近隣市町村4施設、計9つの公共図書館と小中学校の図書館システムがネットワー

クでつながっている。物流も結ばれており、依頼した本が週に一度届くようになっている。ネットワーク化により他図書館資料の貸借が可能だが、授業で使用したい本の情報が直前に届くため、ネットワークを十分に生かしていない。システム・物流を生かしたよりよいサービスを提供するには、司書教諭との連携を密にしたり、授業等で使用したい本の情報が共有されたりする必要がある。ネットワークの有効利用を図っていききたい。

### (3) 安曇野市の取り組み (遠藤愛莉香)

学校司書部会が年に7～8回行われ、情報交換や研修を行っている。部会には必ず「おすすめ本リスト」を持ち寄り、本の紹介活動を行っている。新規採用者には経験のある司書がサポートする体制も整っている。公共図書館の方を講師に本の修理方法を学んだり、情報交換する機会がとられるなど、公共図書館との連携が図られている。平成28年度より公共図書館予算の中に、学校図書館専用資料を購入する予算が設けられた。

### (4) 駒ヶ根市の取り組み (米山篤美)

平成29年度、市立図書館と市内7校の小中学校が連携した初めての試みとして、「駒ヶ根市の図書館を使った調べる学習コンクール」を実施。公益財団法人 図書館振興財団の助成事業「調べる学習コンクール」参加への橋渡しをした。夏休みには地域ボランティアの方や学校職員の協力のもと、「調べる学習相談会」を開き、多くの親子連れが参加した。日常の授業支援では、図書館年間指導計画を作成。先生方が授業しやすいように、授業で使える教材を一緒に作ったり、集めた資料を提供したりしている。今後も先生方と相談し、多機能的に授業支援していききたい。

## 2 協議内容

各発表を聞いての感想発表や各校での授業支援、システム化・ネットワーク化・公共図書館との連携などについての情報交換が行われた。

### (1) 授業支援について

授業の目標等が分からない中、授業を丸投げされることがあったり、授業者の考えがあるので、あまり授業には関わらない方が良いと言わたりすることがあるなど、学校によって、先生方によって図書館利用、学校司書の活用に差がある。新湊南部中学校のように司書教諭と学校司書が連携し、

指導内容が検討されたり、学習のねらいの共通理解が図られたりすることは、とても羨ましい。急な資料依頼に困っているので、図書館年間指導計画を作成し、見直しをもって支援できる体制を整えていきたい。また、支援ができる勤務態勢になるよう、教育委員会に働きかけていきたい。

### (2) システム・ネットワーク化について

人と人とのつながりで頑張っているところと、オンラインでつながっているところと大きな差がある。諏訪市のシステムは先駆的で羨ましい。システム化やネットワーク化を教育委員会にお願いをしているが、なかなか導入してもらえない。子どもたちが同じサービスを受けられる体制を整えていきたい。

### (3) 公共図書館との連携

公共図書館の方と一緒に研修する機会がとられたり、公共図書館の方と一緒に事業を行ったりするなどの体制はあまり整っていない。今回の実践発表を参考に、連携を図っていききたい。

## 3 指導助言

(1) 図書館は読書センター・学習センター・情報センターの3つの機能を持っている。探究的な学習を支える場は図書館である。インターネットでも調べられるが、プリントアウトして終わってしまう。人に聞いたり、自分で調べたりするなど、情報を収集する学習を大事にしたい。

(2) 学校司書の強みは記録し、整理すること。情報センターとしての図書館をつくる上で、どこに何があるか知っているのは学校司書の強みであるので、それを生かして行ってほしい。

(3) 新湊南部中学校の実践はキャリア教育を一つの柱としている。事前と事後の学習に学校司書の協力を得ている実践は素晴らしい。連携するには司書教諭だけでなく、学校司書にも学習内容や必要とする資料等を伝え、学校司書は資料を十分に準備して学習を支えて欲しい。切り抜いた新聞に一言添えるという取り組みも読んでみようかなという気持ちにさせ、情報センターとしての役割を果たしている。

(4) 諏訪市の取り組みはシステム・物流を十分に活用している。また、駒ヶ根市の図書館年間指導計画を使った授業支援は学習センターとしての役割を十分に果たしている。